

昭和53年度修復処置概報

修復技術部

1. 漆芸品・仮面類の修復処置

本年はスウェーデン王立民族博物館よりの依頼で、同館所蔵の江戸時代の漆芸品5点と能面25面の修復を行ったが、これらはわが国との保存環境に差のある地域で起った損傷の実例である。

漆芸品における木部の割損箇所は木屎漆またはアラルダイト SV 426 で充填，成形し，表層剝離箇所は生漆またはバインダー-18，揺変エマルジョン（チクソトロピック・エマルジョン）等による接着を計った。表層欠失箇所は漆下地を施し，透漆を塗った(図-1)。能面における構造上不安のある木部欠損箇所は木粉と酢酸ビニールエマルジョンを練り合せたものを用い，彩色浮上り箇所はバインダー-18，揺変エマルジョン等で接着，同剝落箇所は一部胡粉にバインダー-18を加えたもので成形を試みた。なお漆芸品，能面ともに表層の剝落箇所や補彩で見苦しい部分があり，これ等は今回目立たぬ程度の補筆，修正を行った。

返送にあたっては，今後の保存上重要と思われる温湿度等の留意点を申送った。(中里寿克，新井榛名)

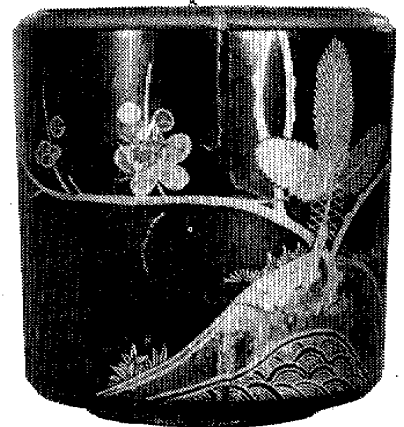


図-1 スウェーデン王立民族博物館所蔵漆芸品

2. 彩色剝落止

静岡県小笠郡大須賀町の三熊野神社および王子神社の絵馬6面の彩色剝落止を行った。5面

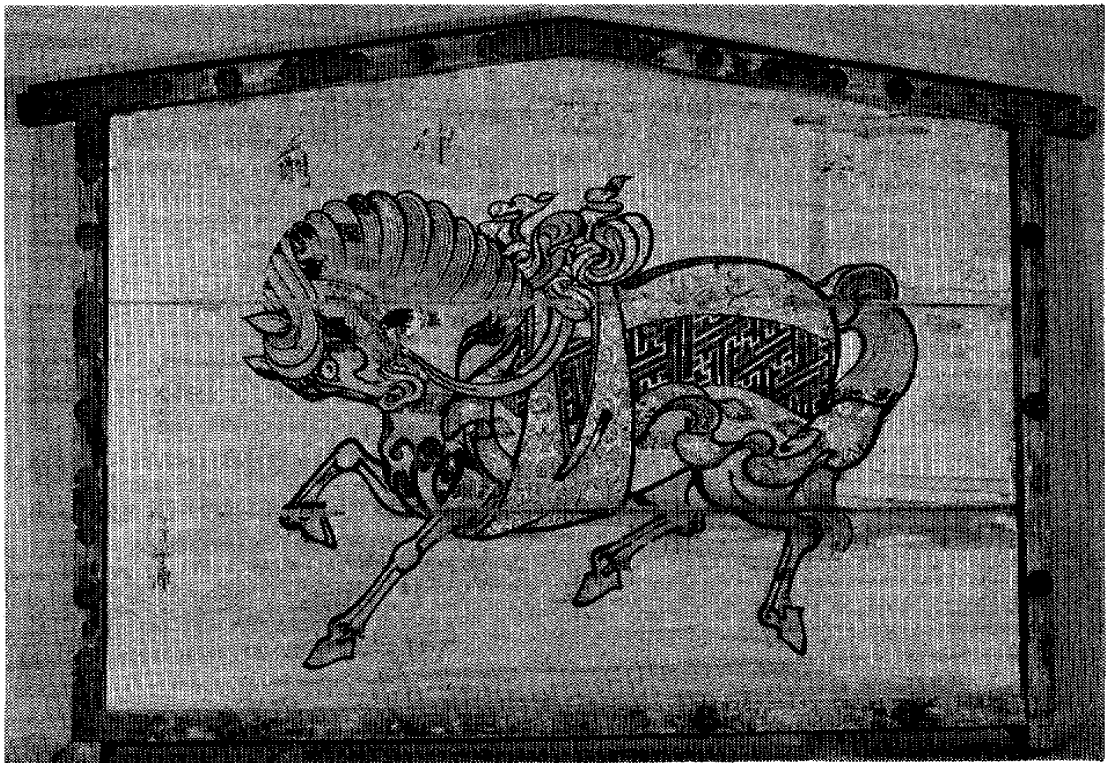


図-2 静岡県小笠郡大須賀町三熊野神社絵馬

には馬，1面には弁慶が描かれている。馬図(図-2)は銘文から江戸時代中期のものであることがわかる。

彩色は，下地層の厚いもの，薄いものがあり，剝離も甚しく，剝落してしまった箇所も多く，また粉状になったものもあった。厚地の剝離に対しては，アクリルエマルジョン(プライマルAC34)，水溶性アクリル樹脂(バインダー18)，アクリル変性酢酸ビニール樹脂(ボンドSP210)を注入，または接着面に直接塗布した。下地層の薄いものや，粉状のものに対しては，AC34，バインダー18を刷毛または筆で塗布して処置した。

弁慶図(郷土画家の大久保一丘筆)(図-3)は，薄い桐板に描かれ，板の反りや収縮によって，彩色層が大きくまたは細片となって剝離し，その上，下地が厚く，硬く，脆いため処置期間は長期にわたったが，使用した樹脂と，その注入法などは他の絵馬と同様である。(茂木 曙)

宮城県松島町の観瀾亭内床貼付及び襖(図-4)が，連日開放された縁側から入る海風によって，下地から離れ始めており，それに加えて，本紙(泥入り間似合紙)の相剝ぎ，彩色の剝離が見られたので，地元の技術者によって，本年度一部分修理が行われた。実査によって，彩色層が極く薄く，水によって十分軟化することがわかったので，小部分でテストを行い，バイ



図-3 静岡県小笠郡大須賀町三熊野神社絵馬



図-4 宮城県松島町観瀾亭内襖

ンダー18を選定し、当該樹脂を注射器によって剝離部に注入するよう施工者を指導し、好結果を得た。なお、観瀾亭内襖の修理は来年度も継続して行われる。(増田勝彦)

3. 出土鉄製品遺物の修復処置

本年度は、受託研究として重文日光男体山頂出土鉄器一括および東京国立博物館保管の兵庫県亀山古墳出土眉庇付冑(図-5)一個、茨城県千代田村出土頭椎大刀(図-6)一口、出土地不詳玉杖一個にアクリル樹脂エマルジョンMV-1を減圧含浸して強化し、破片の接合、欠損部の補修復原を合成樹脂にて行った。また香川県綾南町岡御堂古墳出土短甲は発掘当初すでに脆弱化して、従来は取り上げできなかつたものだが、今回ウレタン樹脂にて取り上げ、室内に持ち込み、修復することができた。これは発掘現場における技術と修復技術を一貫して行なうことに対する研究事例として貴重である。

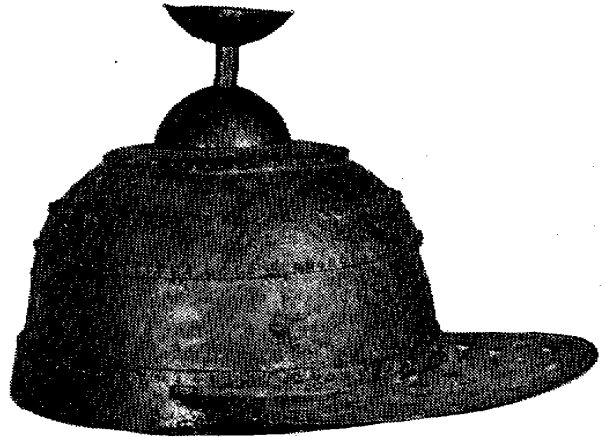


図-5 兵庫県亀山古墳出土眉庇付冑

北海道江差市開陽丸出土大刀に対しては、脱塩処理後、従来検討して来た、タンニンによる処置法を試みた。(青木繁夫・岩本克昌)



図-6 茨城県千代田村出土頭椎大刀

4. 青銅文化財の修復処置

東京国立博物館保管・群馬県前橋市二子山古墳出土金銅製帯一個、福井県松岡町出土金銅製冠二個、およびイラン出土銅剣の処置を実施した。前者は、一部が脆弱化していたが、塩基性塩化銅もなく、比較的良好な保存状態であったため、クリーニング後、アクリル樹脂の減圧含浸をした。後者については、化学分析の結果塩化銅が認められたため、エアブラッシにて塩化銅を除去し、脱塩後、ベンゾトリアゾール法にて処置した。(青木繁夫)

5. 遺構の保存処置

イラク・ハマリン山地テル・グッパ遺跡出土人骨に対して、ウレタン樹脂とエポキシ樹脂FRP 利用による遺構の考古学的取り上げ処置を実施するとともに現地指導を行なった。

従来土層標本は、土層を円柱状に取り、樹脂の中に埋め込むという方法で、作成されて来た。しかしこの方法では土層本来の姿が失なわれるため、考古学的な土層標本としては不適當であった。そこで土層標本をフィルム状にして採取するという方法を検討してきたが、今回東京都大田区久ヶ原遺跡において、酢酸ビニール系樹脂で土粒子同志を結合し、そこにアクリル樹脂で麻布を貼り、それを剥ぎ取り、関東ローム層の土層標本を作成した。(青木繁夫)